Osaka University Knowledge Archive

Title	現代フランス政治過程の研究 : 1981～1995
Author(s)	岩本, 勲
Citation	大阪大学, 1999, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/43022
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【 2 】

氏　　名	岩本　勲（いわもと　いさお）
博士の専攻分野の名称	博　士（法　学）
学位記番号	第　14882　号
学位授与年月日	平成11年6月30日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文名	**現代フランス政治過程の研究** **—1981～1995—**
論文審査委員	（主査） 教授　多胡　圭一 （副査） 教授　河田　潤一　　教授　竹中　浩

論文内容の要旨

ミッテラン大統領治下の1981年～1995年は、フランス第五共和制の政治史において、特筆すべき時代であった。社会党大統領が初めて誕生し、その下で社会党が国民議会選挙で圧勝し、共産党の政権参加も得て、本格的な左翼連合政権が成立したからである。この政権は、先進資本主義国では見られない大規模な産業・金融の国有化を成し遂げ、同時にナポレオン以来の中央集権制度に大きく風穴をあける地方分権制度を打ち立てた。

だが、この政権は1970年以来の失業を減少させるどころか、失業の拡大と構造化を招いた。そのうえに、その経済政策は常に労働者階級の犠牲を伴うものであった。従って、社会党の支持率は低下し、さらにそれに輪を掛けて共産党の支持率が低下し、1993年国民議会選挙では左翼全体として戦後最小の支持率に落ち込むにいたった。

これに対する反動として1980年代半ばより台頭してきたネオ・ナチFNが、急成長し、1995年大統領選挙では15%の得票率を獲得するにいたり、同年の市町村選挙では3都市の首長を初めて手にした。

右翼・中道政党（RPR・UDF）は1993年の国民議会選挙で圧勝し、1995年大統領選挙に勝利したにもかかわらず、その政権基盤は不安定である。

この過程での特徴は、かつて共産党の支持母体であった労働者階級の政治意識が激変し、現在ではこの階級の最大の支持率を得ているのがFNであるという事実である。さらに、選挙民全体の政治意識においても、既成大政党の支持が減少し、同時に無党派化への拍車が掛けられていることである。

拙論は、これらの政治過程について、国政選挙を中心として、あらゆるレベルの選挙の過程とその結果を分析し、併せて世論調査や各種の統計を用いてその実体と原因を実証的に明らかにしようとするものである。

論文審査の結果の要旨

本論文は、政府権力を手に入れたいわゆるユーロ・ソシアリスムやユーロ・コムニスムの党が、現実の政治過程に

おいて、果してどのような政策展開をするのか、その可能性と限界、あるいはその反動性を明らかにするという問題意識にもとづいて、1981～1995年のミッテラン大統領治下の政治過程を論じたものである。その手法は、国政選挙を中心として、殆んど全てのレベルの選挙過程とその結果を世論調査や各種の統計を用いて、その実態と原因について極めて実証的に分析したものである。

分析を通してこの時期のフランス政治の特質として、1左翼の盛衰と極右の台頭、2労働者階級の政治意識の激変、3労働組合の危機、4新中間層の優勢、5構造化した失業問題を抽出した。

本論文は、選挙分析を通じての実証研究であるが、丹念な資料収集と極めて詳細な分析は高く評価出来る。政権が実施した政策のあり方と選挙に表現されるフランス社会のあり方の乖離、その政治的結果に関する論理展開は極めて明解で説得力のあるものである。総じて、この時期のフランス政治過程の研究は、わが国でも今後本格化すると思われるが、本論文はその嚆矢の地位を得るものと判断する。

以上、本論文は博士論文に値いするものと判断する。